

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

イチゴのハダニ類の発生状況と防除対策（技術情報第15号）について（送付）

現在、ハダニ類の発生は平年より多く、2月および3月の気温は高いと予想されているため、今後も増加し続ける可能性が高い。収穫盛期になると防除適期を逸し、さらに多発し防除が困難となる恐れがあるので、第3果房（3番果）の収穫盛期（3月上旬頃から）前までに防除対策を徹底する。

1 発生状況

- 1) 平成26年12月3日付け平成26年度病虫害発生予察注意報第7号でイチゴのハダニ類の発生について注意を喚起したところであるが、巡回調査における本ぼでの寄生葉率は、12月が22.3%（平年5.9%）、1月が12.7%（平年8.8%）と平年より多い発生が続いている（図1）。
- 2) 病虫害防除員からの報告によると、1月の発生は平年より多い発生であった。
- 3) 福岡管区气象台が1月23日に発表した九州北部地方3か月予報によると、2月および3月の気温は平年より高い予想で、ハダニ類の発生に好適な条件となることが予想される。今後、気温の上昇とともに、急激に発生が拡大する恐れがある。

2 防除対策

- 1) 農業技術支援室によると、地域や品種等でばらつきはみられるものの、本年は第2果房（2番果）の収穫盛期はやや前進化し、第3果房（3番果）はやや後退する見込みである。収穫盛期になると適期防除が困難になるため、3番果の収穫盛期を迎える前の3月上旬頃までに防除対策を徹底する。
- 2) 現在、発生が少ないほ場も、早期発見と早期防除に努める。
- 3) ハダニ類が寄生した葉は、できるだけ除去する。除去した葉は、ハウス外に持ち出しビニール袋等に入れ密閉処分する。
- 4) ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、薬剤防除は、薬液が葉裏に十分かかるように、丁寧に散布する。また、薬剤がかかりやすくなるように防除前に老化葉および不要な下葉は除去する。
- 5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。
- 6) 気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵に効果が無く、残効性も無いため、7日程度の間隔で複数回散布し、卵から孵化したハダニ類も防除する。

- 7) 薬剤の中には天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）やミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、導入している有用生物に影響の少ない薬剤を体系的に使用する。
- 8) 天敵を導入しているほ場においては、ハダニ類の増殖と天敵の有無を確認して薬剤防除への切り替えの判断を行う。なお、つぼ状の発生地点がほ場全体に見られる場合には、天敵に影響が少ない薬剤の散布後に天敵の追加放飼をするか、薬剤防除への切り替えにより防除を徹底する。
- 9) 農薬は、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を守り、農薬の安全使用に努める。

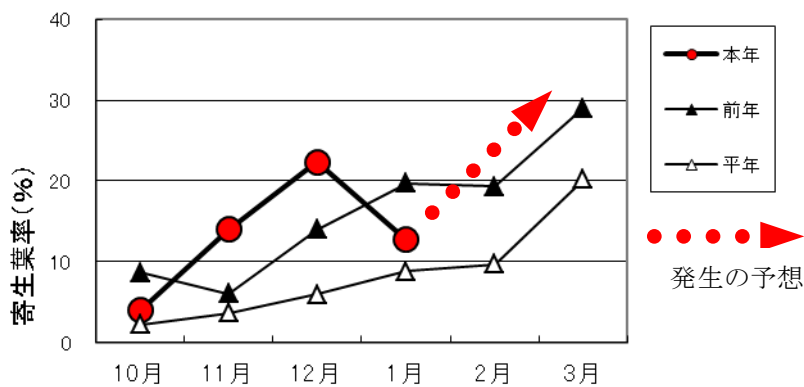


図1 巡回調査におけるハダニ類の寄生葉率の推移
(本ほ)

熊本県農業研究センター 生産環境研究所
 病害虫研究室 予察指導係 (病害虫防除所)
 担当：荒木、児玉 TEL：096-248-6490